新たな文化施設に関する整備構想
（素案）

秋田県・秋田市

目　次

第１章　整備構想策定の趣旨
１　整備構想策定の背景・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３
２　整備構想の策定・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３
３　整備構想の性格・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４

第２章　文化施設の現状と課題
１　文化振興に関する県民･市民の意識 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５
２　本県の文化施設の設置状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６
３　秋田県民会館の現状と課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６
４　秋田市文化会館の現状と課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・９

第３章　新たな文化施設の整備の必要性
１　施設を取り巻く状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１２
２　整備の必要性・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１２

第４章　新たな文化施設に求められる機能と整備すべき施設機能
１　県民会館・市文化会館が文化振興に果たしてきた役割・・・・・・・・・・・・１４
２　新たな文化施設の役割と担う機能・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１５
３　整備すべき施設機能の考え方・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１６

第５章　立地環境
１　基本的考え方・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１８
２　郊外及び市街地の一般的な比較・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１８
３　求められる立地環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１８

第６章　県内他圏域への波及効果
１　文化の鑑賞機会の拡充・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２０
２　観光誘客効果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２０
３　全県をカバーする文化施設としての機能発揮・・・・・・・・・・・・・・・・・・２０

第１章　整備構想策定の趣旨

１　整備構想策定の背景

（１）　国の文化政策の動き

平成１３年１２月に、国は、積極的な文化行政を展開し、心豊かな国民生活及び活力ある社会の実現に寄与していくため、文化芸術の振興に関する施策を総合的に推進するための基本理念を定めた初めての法律である「文化振興基本法」を制定し、国や地方自治体等の役割を明記した。

平成２４年６月には、地方において、文化施設が劇場や音楽堂として十分に機能が発揮されておらず、多彩な実演芸術に触れる機会が少ない等の課題を踏まえ、「劇場、音楽堂等の活性化に関する法律」を定め、地方の文化会館等の劇場等が有効に活用されることで実演芸術の振興が図られ、心豊かな国民生活及び活力ある地域社会の実現に寄与していくため国・地方の役割を明確にし、取り組むべき事項などを明らかにしている。

この法律の制定に合わせ、劇場・音楽堂等活性化事業が創設され、地方の劇場･音楽堂等の文化ホールの活性化に向けた支援が強化されるなど、文化振興関連予算も厚みを増してきている。

このような状況の中、近年、日本のいくつかの地域では、新たな理念のもとに、文化ホールを単にイベント開催の会場として捉えるのではなく、住民自らが活発に活動すること、交流拠点、地域活性化としての機能を十分に考慮し、整備前から運用も含めて検討することで、有用性の高い施設を目指そうという動きが見られるようになっている。

（２）　県・市の文化施策の展開

県は、国民文化祭の開催が決まったことを受け、平成２３年８月に「あきた文化ルネサンス宣言」を行い、「アキタ・ミュージックフェスティバル」や「ＫＡＭＩＫＯＡＮＩプロジェクト秋田」などの取組も展開しながら、「地域の文化力を高め、文化の力で地域を元気にする」ことを基本理念とし、国民文化祭を開催することにしている。

また、秋田県の中心都市として秋田県経済や文化をリードしてきた秋田市は、平成20年度に中心市街地活性化基本計画を策定し、美術館やアトリオン、県民会館など文化施設が集積する中心市街地に、新県立美術館やにぎわい交流館を中核とした「エリアなかいち」を整備するなど、歴史と文化を生かした街づくりに取り組んでいる。

２　整備構想の策定

ここ数年、県･市ともに文化振興に力を入れて取り組んでいる中にあって、その振興を図って行く上で、大きな役割を果たす県民会館及び秋田市文化会館ともに、施設として課題を抱えている。

県内最大規模の収容規模（1,839 席）を誇る秋田県民会館については、築後 52 年が経過し施設の老朽化が進んでいるほか、舞台が狭く、楽屋数も少ないこともあり、若者を集客できるコンサート、舞台装置が大がかりなオペラや演劇等を実演できないなど、様々な課題を抱えている。

また、秋田市文化会館についても、築後 33 年が経過しており、耐震補強など大規模改修が必要となっている。

そのため、これらの施設に替わって、ホールに加え、コンベンション機能も備えた文化施設を県市共同で整備していくため、新たな文化施設に関する整備構想を策定する。

３　整備構想の性格

整備構想は、新たな施設を整備するとした場合、施設に求められる役割や主な施設機能、他圏域に効果をもたらす施設のあり方などに関し、全県的な視点に立って、基本となる考え方を包括的に取りまとめるものである。

第２章　文化施設の現状と課題

１　文化に関する県民･市民の意識

整備構想を策定するにあたり、県･市共同で県民 3,000 人(うち秋田市 1，000 人)を対象に「文化振興に関する県民･市民意識調査」を実施した(有効回答者数 1，602 人（うち秋田市 525 人）)。

この調査によると、日常生活で芸術を鑑賞するなど文化活動を大切だと考える人は 87.1%（秋田市 87.1%）となっており、大多数の県民・市民が文化活動を重要視している結果となった。

その主な理由として「生活に潤いを与える」66.0%(秋田市 69.9%)、「教養を深め、人間性を高める」55.5%（秋田市 62.1%）の次に「人の交流を生みだし、地域に活気をもたらす」43.3%（秋田市 42.3%）となっており、文化による元気創出への期待が伺われる結果となっている。

「文化振興に関する県民･市民意識調査」結果（抜粋）

〈芸術を鑑賞したり、自ら文化活動を行ったりすることの重要性〉　（%）

	全県(1,602 件)	秋田市(525 件)
非常に大切だ	21．8	26．7
ある程度大切だ	65．3	60．4
あまり大切ではない	5．1	5．3
全く大切ではない	1．1	1．0
わからない	6．4	6．5

※　無回答があるため合計は 100%にならない

〈文化が果たす役割〉（複数回答）　（%）

	全県(1,602 件)	秋田市(525 件)
楽しさや感動を与え、生活に潤いを与える	66．0	69．9
教養を深め、人間性を高める	55．5	62．1
文化への理解が進み、地域への誇りや愛着を増進する	30．8	30．1
芸術文化に感動する心が、人々をつなぎ、地域の結びつきを深める（地域の連帯感が強くなる）	31．0	28．6
芸術文化に触れることを通して、地域の子ども達がはぐくまれる	31．3	31．0
人の交流を生み出し、地域に活気をもたらす	43．3	42．3
特にない	4．1	4．4
その他	1．2	1．5

また、文化芸術に文化施設が果たす役割についてどのように考えるかに関しては、「非常に大切だ」、「ある程度大切だ」とする回答が合わせて 80.7%（秋田市 83.6%）となっている。

〈文化芸術の振興を図っていくうえで、文化施設が果たす役割〉　（%）

	全県(1,602 件)	秋田市(525 件)
非常に大切だ	28．2	37．9
ある程度大切だ	52．5	45．7
あまり大切ではない	7．6	7．0
全く大切ではない	2．8	4．0
わからない	6．7	3．8

※　無回答があるため合計は 100%にならない

アンケート調査によっても、県民･市民の文化活動への関心は高く、文化施設が文化振興上に果たす役割についても重視している結果となった。

2　本県の文化施設の設置状況

秋田県内の全ての市町村が何らかの公立の文化施設を設置しているが、そのうち、文化ホールと分類される施設は15施設となっている。昭和の時代に整備されたものが多く、建築後20年以上を経過したものが11施設あり、このうち30年を経過している施設も9施設となっている。

施設の稼働率については、平成24年度に一般社団法人全国公立文化施設協会が実施した「劇場、音楽堂等の活動状況に関する調査研究報告書」によると、平成23年度の全国の公立文化ホールの稼働率は平均で62.9%（回答1,049施設）であり、秋田県民会館及び、秋田市文化会館はこの数値を上回っているものの、秋田市以外に設置された施設では、全国平均を上回っているのは３施設にとどまっている。

3　秋田県民会館の現状と課題

（１）施設の概要

竣工年月日	昭和３６年９月３０日
開館日	昭和３６年１１月６日
建設費	４１１百万円
構造	鉄筋コンクリート造　地上４階地下１階建
延床面積	５，７７９．７９㎡
収容人員	大ホール　１，８３９席（１階 1,192 席、２階 647 席）
舞台	幅１９．８ｍ、奥行１１．４ｍ、高さ８ｍ
施設構成	大ホール、楽屋４、会議室３、展示室１、大会議室１ 【ジョイナス分】小ホール 1、研修室 8、練習室 3
指定管理者	H18～22、H23～27　(財)秋田県総合公社

（２）利用の状況

①稼働率等

これまでの利用者数は、東日本大震災があった平成 23 年を除けば概ね年間 15 万人前後で推移しており、秋田市の中心市街地の賑わいづくりにも貢献している。

過去３年間の稼働率は 70%～80%台となっており、全国の同規模の施設と比較しても高い利用率となっている。

この最大の要因は、本県が中学校、高等学校など学校教育での吹奏楽が盛んであり、その利用が多いことにある。

区　分	項目	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度
大ホール（1,839 席）	利用可能日数	２４０	２０９	２９３
	利用日数	２０３	１６９	２１８
	稼働率	８４．６％	８０．９％	７４．４％
	利用人数	142,181	110,949	167,772

②利用回数

過去３年間の全体の利用回数は、平成 23 年を除いて、200 回以上となっており、年平均では、208 回となっている。そのうち、興業を含めた音楽関係の利用が約 75%を占めており、中でも学校・県内団体利用は、全体の 46%を占めている。

また、秋田県吹奏楽連盟が主催する各種の催しは、全県を対象としたものとなっている。

次いで多いのが、興業の 46 回で 22%を占めており、観客は秋田市を中心としつつも、県内各地からの集客となっている。

学会・大会では、秋田県身体障害者福祉大会や戦没者追悼・平和祈念式典のように全県規模で毎年継続して開催されているものに加え、全国レベルの学会や大会も行われている。

（単位：回）

年	音楽関係				音楽関係以外					計
	興業	学校 県内団体	イベント	小計	興業	学校 行事	学会 大会	その他	小計	
Ｈ２２	32	88	22	142	15	8	40	10	73	215
Ｈ２３	26	94	19	139	5	8	21	2	36	175
Ｈ２４	51	105	29	185	10	11	29	0	50	235
平均	36	95	23	155	10	9	30	4	53	208
%	17.4	46.0	11.2	74.6	4.8	4.3	14.4	1.9	25.4	100

※　一日2公演の場合もあるため、アの利用日数とイの利用内容の行事数は一致しない。

③　規模別開催状況

収容定員の約９割にあたる 1,600 人以上の入場者のイベントは、年平均で 36 回（17.3%）となっており、そのうち音楽関係は年平均 30 回（14.4%）となっている。なお、1,300 人以上までのイベントを含めると、57 回で、全体の 30%弱となっている。

他方、入場者数 500 人未満のイベントは年平均 91 回（43.8%）となっているものの、このうち、学校の吹奏楽の練習が半分近くを占めている。

（単位：回）

人 ＼ 年度	全体					
	～499	500～899	900～1,299	1,300～1,599	1,600～	計
Ｈ２２	103	32	20	30	30	215
Ｈ２３	77	24	24	20	30	175
Ｈ２４	92	39	27	28	48	234
平均	91	32	24	26	36	208
%	43.8	15.4	11.5	12.5	17.3	100.0

※平均欄及びその%は端数処理のため、計と一致しない。

（２） 主な課題

県民会館は、築後 52 年を経過し、施設・設備の老朽化に伴い、鑑賞者や施設利用者の多様化･高度化するニーズに､機能が十分に対応できない状況になっている。

舞台周り	・スペースが不足している等の理由で、複数のセットを利用する場面転換のある出し物は難しい ・バトン数が不足しているため、吊り下げ用のセット・幕、ピンスポットライト、ムービングライト等も制限され、同規模の他施設なみの演出ができない
楽屋	３つの楽屋しかなく、トイレ・シャワー付きの部屋もないため、上演者が多い場合には、館内１Ｆ小会議室、展示室を臨時使用せざるを得ない状況となっている。
照明	舞台上照明はホール天井部に１列配置、不足分は両サイド照明で補正、ピンスポットルームは設備不足
搬入口	屋外搬入で雨よけに搬入部分に短い庇があるが十分ではない。 搬入口～土手側ガードレールまでの距離約１３ｍ大型車の乗り入れが困難である。
空調設備	空調が１階、２階の別途制御できない構造となっており、効率性が悪いほか、全体の空調管理も難しい
ホワイエ	ホワイエが狭く、観客が滞留できるスペースが不十分である。物販ブースも必要スペースを設けられないため、確保しづらい。
その他	席数 1,839 人の規模に対し、女性用トイレ数は、30 と極端に少ない。（座席数 700 人のアトリオンホールの場合、女性用は 47）

４　秋田市文化会館の現状と課題

（１）施設の現況

①施設の概要

竣工年月日	昭和５５年４月３０日
開館日	昭和５５年６月２８日
建設費	３，５６４．５百万円
構造	鉄骨鉄筋コンクリート造　一部鉄骨造　地上５階、地下１階、塔屋２階
延床面積	１４，２８４㎡
収容人員	大ホール　１，１８８席（１階 884 席、２階 304 席） 小ホール　４００席
大ホール舞台	幅１６ｍ、奥行１５ｍ、高さ８ｍ、
小ホール舞台	幅８ｍ、奥行６ｍ、高さ５ｍ
施設構成	大ホール（楽屋６）、小ホール（楽屋４）、展示ホール、大会議室、練習室２、リハーサル室、第１会議室、託児室 【サンパル分】 講堂２、洋室３、和室４、茶室、音楽室、調理室、陶芸室、工作室、談話室
管理手法	直営（職員５人、嘱託４人）

（２）　利用の現状

①　稼働率等

市文化会館の過去３年間の稼働率は大ホールが 60％台～70％台、小ホールが 50％台～60％台となっている。

大ホールは、市内の音楽、演劇関係団体の利用が多く、公演およびその練習場所として活用されることから、比較的高い利用率となっていると思われる。

小ホールは、客席数（収容人数）から、比較的小規模な講演会や集会での使用が多い状況となっている。

区　分	項目	平成22年度	平成23年度	平成24年度
大ホール (1,188席)	利用可能日数	292	301	251
	利用日数	188	201	184
	稼働率	64.4%	66.8%	73.3%
	利用人数	110,720	100,369	95,873
小ホール (400席)	利用可能日数	292	301	248
	利用日数	157	175	160
	稼働率	53.8%	58.1%	64.5%
	利用人数	32,133	27,981	32,906

②　利用内容

大ホールは、音楽関係が 17.1%、演劇関係が 11.1%と高い割合を示しており、興行のほか学校行事の会場としても利用されている。また、練習での使用が 26.9%となっており、市民の芸術文化活動の拠点として、芸術文化団体や学校の発表および練習の場として多岐にわたり利用されている。

小ホールは、音楽関係の利用が 25.9%ともっとも高いが、講演・講義が 18.8%、集会式典が 16.5%となっており、大ホールに比べて官公庁や法人が開催する講演行事での利用割合が高くなっている。

（単位：回）

大ホール

年度	音楽	舞踊	演劇	伝統芸能	大衆芸能	総合芸術	映画	練習	講演講義	集会式典	その他	計
22年度	43	10	24	9	2	14	3	56	15	18	22	216
23年度	37	12	25	13	5	4	1	51	18	22	28	216
24年度	32	10	23	10	4	10	0	68	9	20	31	217
平均	37	11	24	11	4	9	1	58	14	20	27	216
割合(%)	17.1	5.1	11.1	5.1	1.8	4.2	0.5	26.9	6.4	9.3	12.5	100.0

（単位：回）

小ホール

年度	音楽	舞踊	演劇	伝統芸能	大衆芸能	総合芸術	映画	練習	講演講義	集会式典	その他	計
22年度	47	1	10	5	1	6	10	13	35	24	17	169
23年度	49	1	7	10	1	5	9	7	34	26	26	175
24年度	37	1	6	7	0	4	9	21	28	34	19	166
平均	44	1	8	7	1	5	9	14	32	28	21	170
割合(%)	25.9	0.6	4.7	4.1	0.6	2.9	5.3	8.2	18.8	16.5	12.4	100.0

③　規模別開催状況

大ホール（客席数 1,188 席）では、もっとも多い開催規模は、300 人未満が 44.9%となっているが、このうち半数が吹奏楽の練習、演劇発表会など学校関係の使用となっている。また、900 人未満の規模のものが 81.0%となっており、大ホール１階席 884 席でほぼ対応可能な規模での使用が多い状況となっている。

900 人以上の規模のものは、プロモーターによる興行、または官公庁による公演などとなっており、客席数から大規模な興行には対応できないことから、使用者が限られていると考えられる。

小ホール（客席数 400 席）では、もっとも多い開催規模は、100 人未満が 36.4%。次いで 300 人以上が 25.9%となっており、いずれにおいても、地元の芸術文化団

体や演劇団体の発表の場としての活用が多く見られる。

（単位：回）

人 / 年度	大ホール					小ホール				
	～299	300～599	600～899	900～	小計	～99	100～199	200～299	300～	小計
22年度	93	31	47	45	216	56	40	30	43	169
23年度	89	45	45	37	216	69	42	27	37	175
24年度	110	32	33	42	217	62	27	26	51	166
平均	97	36	42	41	216	62	36	28	44	170
%	44.9	16.7	19.4	19.0	100.0	36.4	21.2	16.5	25.9	100.0

（３） 主な課題

施設・設備	築 33 年を経過しており、調光等の舞台関係のほか、空調、給排水等設備のほとんどは耐用年数を経過しているため、突発的な故障による催事への影響が懸念されることから大規模改修が必要 平成 17 年度の耐震診断調査の結果では、耐震補強を要するとの診断が出ている
舞台周り	大小ホール舞台の調光設備については、平成 24 年度に更新したが、舞台床周りの照明機器の劣化や音響設備の更新など、根本的な対応が必要

第３章 新たな文化施設の整備の必要性

１　施設を取り巻く状況

（１）老朽化が著しい施設

秋田県民会館は、県内最大の収容定員を誇る文化施設として、県民への鑑賞機会の提供や、音楽団体を中心とした発表の場として、全県を対象とした催し物も多く開催され、年間 70%～80%台という高い利用実績のもと、本県の芸術文化の振興を図る中核施設として、県民に親しまれ利用されてきた。

秋田市文化会館も、1,188 席の大ホールと 400 席の小ホールを有し、演劇やバレエなどの舞台芸術から、伝統芸能、講座・講演など、幅広い市民ニーズに応え、市民の文化活動の場としての役割を果たしてきた。

しかし、県民会館は築後 52 年が経過し、施設全体の経年劣化が進んでおり、鑑賞や施設利用者のニーズに十分対応できない施設となっており、市文化会館も築後 33 年が経過し、老朽化の進行と併せ、耐震補強など大規模な改修が必要な状況にある。

（２）厳しくなる財政下での施設の維持管理

秋田県では、人口減少に歯止めがかからず、全国で最も早いスピードで高齢化が進んでいる中で、財政を取り巻く状況も年々厳しさを増している。今後、施設や設備の改修経費等を十分に確保できない恐れもあり、結果として維持管理コストの増大につながり、施設が本来果たすべき機能が更に脆弱となる可能性もある。

多額の経費が見込まれるプロジェクトにあっては、特に施設の管理運営をも見込んだ効率的・効果的な取組が必要となる。

２　整備の必要性

（１）存在しない代替施設

県民会館及び秋田市文化会館は老朽化など様々な課題を抱えているが、秋田市内の現存する施設の中で、この二つの施設に替わる機能を果たし得る施設は存在しないことから、施設整備は取り組まなければならない課題である。

（２）新たな文化施設の可能性

「文化振興に関する意識調査」では、新しい文化施設に期待する項目として「流行のアーティストの公演」が最も高い割合を占めている。音楽イベントのプロモーターへの聞き取り調査では、新たな文化施設の整備により、有名アーティストの公演やツアーコンサートは増えるとの見解が寄せられている。

また、コンベンションに関しても複数の会場での開催を余儀なくされているものの、ここ数年増加傾向にある。

新たな文化施設において、これまでにないコンサートの開催、一定規模の会議・大会の開催に対応できる機能を付加することで、従前の施設では成し得なかった様々な取組が可能となる。

（３）県・市協働プロジェクトとしての意義

今後の県･市を取り巻く状況を鑑みた場合、県・市が協働で、新たな文化施設の整備を進め、施設の管理運営にもあたることは、それぞれ別々に整備を行うよりも有益であり、行財政改革の観点からも有用な取組と考えられる。

県・市協働プロジェクトは、各自治体における公共施設の維持管理が増大し、大きな行政課題となってくる中で、我が国における今後の一つのモデルにもなり得る意義のある取組といえる。

以上のことを勘案すれば、新たな文化施設を県･市が協働して整備していくことで、文化の振興はもとより、地域の賑わい創出を図っていくことの意義は大きく、適切なものと判断される。

施設の整備にあたっては、県民会館、市文化会館が果たしてきた役割を踏まえつつ、適切な役割分担のもとに、より高度な機能を持たせながら、地域や社会の要請に応えたものとしていくことが求められる。

その基本として考えられるのは、「実演芸術」の発表・鑑賞ができる２つのホールに、コンベンション機能を付加した施設である。

第４章　新たな文化施設に求められる機能と整備すべき施設機能

１　県民会館・市文化会館が文化振興に果たしてきた役割

県民会館及び秋田市文化会館は、自主事業などを通した文化の創造、施設運営に携わる人材育成、文化芸術の情報発信などに関しては課題を残しているものの、文化施設として、「発表の場」の提供や「鑑賞機会」を提供し、文化の振興や、多数を集客できる施設として、街の賑わいづくりにも貢献している。

（１）「発表の場」の提供

① 県民会館は、県内中高生やアマチュアの吹奏楽団体や合唱団などの音楽関係団体にとり、県内での最高の発表の舞台であり、他県に比しても高い水準と言われる吹奏楽をはじめとし、音楽文化の質的向上や裾野の拡大に貢献してきた。（平成24年度、県内音楽団体等の利用回数101回）

② 市文化会館は、舞踊関係団体や演劇団体などに広く活動の場を提供してきた（平成24年度、大ホールの利用回数23回）。また、多くの文化団体の活動拠点となっており、芸術文化に携わる市民が集うことで、情報発信、文化の継承の場として機能してきた。

（２）「鑑賞機会」の提供

① 秋田県民会館は、ＮＨＫ交響楽団や日本フィルハーモニー交響楽団のクラシックコンサート、松竹大歌舞伎や舞台公演、芸能人のコンサートなど、全県規模で集客できる幅広い分野の鑑賞機会を提供してきた。

なお、秋田市内には、両施設以外に1,000人以上の収容能力を持つ文化施設は存在しないため、国内外のアーティストの興行系コンサートの会場にもなっている。（平成24年度興行系コンサート開催回数　県民会館61回、市文化会館40回）

② 秋田市文化会館は、秋田県民会館に次ぐ規模の文化施設として、昭和55年の開館以来、比較的大掛かりな舞台を必要とするバレエなど、舞台芸術を中心とした公演の鑑賞機会を提供してきた。

③ 昨年９月、秋田市文化会館において、秋田市内の小中学生が、秋田市と友好交流のある中国甘粛省蘭州市の蘭州大劇院の歌舞劇を鑑賞する機会があり、文化施設の存在は、子ども達が一流の芸術を鑑賞する機会につながっている。子ども達は、質の高い芸術文化に触れることで、それぞれの個性や創造性の芽を育み、文化的活動への興味と意欲を醸成することとなり、こうした体験を増やすことが本県の文化的な土壌を豊かにしていくことにつながると考えられる。

２　新たな文化施設の役割と担う機能

新たな文化施設は、「秋田の文化力を高め、文化の力で地域を元気にしていく」ため、「文化創造に向けた取組の活発化」、「文化に触れる機会の拡充」、「人が集う「場」を創出することで地域の活性化に貢献」するという、３つの役割のもと、それぞれの機能を果たしていく。

（１）文化創造に向けた取組の活発化を図っていく

県民・市民が集い、「創造」、「練習」、「発表」という各ステージで、優れた環境を提供し、創造的な活動を促進していく。

①　最高の舞台での実演芸術の発表の場

県民会館が、県内中高生の吹奏楽団体が県内で演奏するための最高の舞台を担ってきたように、県内の芸術文化団体が、そこで発表することを目標とし、技芸を磨くことで、本県の実演芸術の水準の向上につながる多様な文化芸術活動の「発表の機会」を提供する。

②　文化の創造の場

県市による文化活動への支援に加えて、施設運営者が積極的に外部資金を確保しながら、文化創造に向けた取組を県民・市民と一体となって積極的に推進していくとともに、民間団体等の多様な活動のサポートや学校教育との連携も強化しながら、日常的な芸術・文化活動の活発化を図っていく。

③　全県をカバーする文化施設としての機能発揮

本県の芸術文化の発信や県内文化会館の一元的な情報発信を可能とする「文化情報センター」的な機能を備えるとともに、県内文化施設間におけるネットワーク事業の取組、様々な文化情報の収集や市町村文化会館に対する情報提供、相談窓口など、全県をカバーする文化施設としての機能強化を図る。

（２）文化に触れる機会の拡充を図っていく

これまで秋田では開催できなかった若者を多数集客できるコンサートなど、国内外の一流のアーティストによる実演芸術を数多く開催することで、県民・市民の芸術文化に触れる機会を拡充し、本県の文化の裾野を広げる。また、全県の文化施設をカバーすることで、県内全域の文化鑑賞の機会の充実を支援する。

質の高い芸術鑑賞機会の提供

質の高い文化芸術に触れる機会が少なかった県民・市民の文化の裾野を広げていくため、これまでは秋田仕様（カットバージョン）でしか公演できなかった若者を引きつける大型コンサートや大掛かりな舞台演劇に加え、ミュージカル、オペラなど国内

外のアーティストによる実演芸術の上演など、「鑑賞機会」の充実を図る。

（３）人が集う「場」を創出することで、地域の活性化に貢献する

地域の賑わい創出

県民・市民に芸術文化の発表・鑑賞の「場」を提供することに加え、コンベンションの開催誘致にも力を入れ、交流人口の拡大にも貢献し、本県の文化振興はもとより、地域の元気創造の一翼を担う施設とする。

また、新たな文化施設は、文化の薫る施設として、秋田市における街並み形成にも資するものとする必要がある。

3　整備すべき主たる施設機能

新たな文化施設は、本県文化振興の中核としての役割を踏まえ、高機能型ホール、舞台芸術型ホールを主たる機能構成とし、これまで県民会館、市文化会館が果たしてきた役割の機能強化を図るとともに、それぞれのホールの役割分担を明確にし、県民･市民のニーズに十分に応えられるものにする。

（１）高機能型ホール

①　主な用途

吹奏楽を中心とするクラシックなどの音楽鑑賞はもとより、発表の場としての機能を高度化するとともに、これまで秋田では上演できなかった若者を多数集客できるポップス、ロック等のコンサートやフルバージョンでの演劇、歌舞伎等の舞台芸術の上演

②　舞台や設備

ホールの主舞台は、大掛かりな舞台の仕掛けにも十分対応できるステージとバックヤードを持つものとする。また設備に関しては、最新のホールが標準的に装備しているものを備える（バトン数や照明の設置場所など県民会館の課題をクリアした設備）

③　客席数

1,８００～2,２００席

（２）舞台芸術型ホール

①　主な用途

質の高い舞台芸術（舞踊、演劇など）の実演

②　主な設備

観客が舞台と一体感を持って鑑賞できる空間とする。

質の高い舞台芸術が実演可能な舞台とし、舞台床周り照明、音響などグレードの高い設備を備える。

③　客席数

８００～1,２００席

〈共通事項〉

これら２つの施設に付随して楽屋、リハーサル室、トイレなど所用の施設を整備する。これら以外の施設に関しては、構想の具体化に併せ検討する。

（３）コンベンションへの対応

秋田市以外の東北の県庁所在市は、全て2,000人以上のコンベンションに対応できる施設を有している。

そこで、高機能型ホール（1,800席～2,200席）と舞台芸術型ホール（800席～1,200席）を整備することで、3,000人程度までの大会・会議に対応できるようにする。

大会･会議の開催に関連して催される商品・製品などの展示会や、分科会用の会議室に関しては、建物に付帯する施設やエントランスロビー等の活用を検討していく。

第５章　立地環境

１　基本的考え方

大規模な公共施設の整備に際しては、当該施設の立地環境が大きな議論となるが、大別すれば郊外と市街地のどちらに設置するかに集約される。それぞれにメリット、デメリットがあるが、「文化の力で地域を元気にしていく」上で、施設整備の効果を最大限発揮していく視点から考える必要がある。

なお、老朽化が著しい県民会館は解体する方針であり、市文化会館については、新たな文化施設の整備と併せて検討していく予定であるが、現地での立て替えは長期間施設の利用ができないなど、デメリットが大きいことから困難と考えている。

２　郊外及び市街地の一般的な比較

	メリット	デメリット
郊　外	・土地が安価であり、広い土地の取得も容易と思われ、比較的余裕のある施設空間や駐車場の整備が可能となる。 ・自動車でのアクセスは容易となるケースが多い。	・郊外には文化施設が少ないことから、他の施設との連動性や連携は難しくなる ・秋田市が掲げるコンパクトなまちづくりの方向性とは異なったものとなる。 ・バス等の公共交通機関によるアクセスは比較的不便となる。
市街地	・文化施設をはじめ都市機能が集積しており、他の施設との連動性や連携が容易になる。 ・秋田市のコンパクトなまちづくりの方向性と一致し、街の賑わい創出にも貢献できる。	・駐車場用地を含め余裕のある空間構成が制約される可能性がある。

３　求められる立地環境

新たな文化施設の立地環境について、重視すべきは、次の視点である。

（１）文化振興を図っていくことはもとより、交流人口の増大を図り、街の賑わい創出にも寄与する。

（２）既存の文化施設との連動性を確保することで、「文化芸術ゾーン」を形成し、魅力ある街づくりにも資する。

（３）少子高齢化、人口減少の進展を見据え、秋田市が進めている、コンパクトで成熟した市街地の形成にもつなげていく。

建設予定地をどこに求めるかで、「市街地」「郊外」のメリット、デメリットの評価も微妙に変わる可能性もあるが、今後ますます少子高齢化が進む中で、新たな文化施設の整備は、県民・市民の利便性に最大限配慮するとともに、文化の薫る街づくりを進めながら、賑わい創出にも貢献していく必要がある。

以上のことを勘案すれば、新たな文化施設の立地環境は「市街地」が適当である。

なお、市街地へ整備する場合は、「駐車場」に関しては、必要最小限の整備図るにしても、基本はバス等の公共交通機関や、近隣の公営あるいは民間駐車場の利活用を促進していくことになる。

第６章　県内他圏域への波及効果

新たな文化施設は、県立の施設としての性格を有していることから、整備にあたっては、秋田市のみならず他圏域にも波及効果がもたらされるよう考慮する必要がある。

１　文化の鑑賞機会の拡充

ツアー型コンサート等を多数、秋田市内に誘致できれば、県内他市の1，000人規模の収容能力を持つ中規模ホールで、縮小型のコンサートの開催の可能性も生じる。興業主等へのインタビュー調査では、ツアー型のコンサート等は、できるだけ多くの都市で開催できる方が採算性が高くなるため、近隣地での連続した開催が望ましいという意見もあった。

また、文化庁の補助事業には、いくつかの文化会館が共同で同じコンサート等を実施することを条件に助成対象とするというメニューもある。

新たな文化施設が県内各地の文化会館の意向を取りまとめ、こういった企画を先導していくことで、他圏域への質の高い実演芸術の鑑賞機会の提供につなげていく。

２　観光誘客効果

全国ツアーを展開するアーティストには、特定のファン層がいるため、コンサート等の開催により、県外からの集客を期待できる。集まった観客は県内施設に宿泊し、その後県内各地に観光で訪問することも期待されるため、大規模な文化施設の整備は秋田市にとどまらず県内全域への経済波及効果が期待できる。

また、コンベンションの開催においては、エクスカーションとしての観光がつきものである。県内には、世界遺産の白神山地や男鹿、田沢湖、角館など全国に名の知られた観光地があることから、大規模な会議･大会のエクスカーションの実施を、関係市町村と連携して働きかけていくことで、波及効果を積極的に取り込んでいく。

３　全県をカバーする文化施設としての機能発揮

本県の芸術文化の発信や県内文化会館の一元的な情報発信を可能とする「文化情報センター」的な機能を備えるとともに、県内文化施設間におけるネットワーク事業の取組、様々な文化情報の収集や市町村文化会館に対する情報提供、相談窓口など、全県をカバーする文化施設としての機能強化を図る。